

# 龍田姫／曝書の空

谷内ひろ志／高野夕雀

1  
句  
集

龍  
田  
姫

谷内 ひろ志

谷内 宏

昭和十四年一月二十二日生

北海道磯谷郡蘭越町

平成十一年湾に入会。

大岳水一路先生に師事。

平成十七年湾同人。

日脚伸ぶ長子神戸に世帯持つ

立春や子の逞しき背中見る

勝鬨の雄叫びあぐる雪解川

白濁す小樽の浜や鯨群来

志飽くまで高く揚雲雀

涅槃雪降りしきる中樞出づ

清流を臨める丘や桐の花

爆心地立ち去りがたき薄暑かな

父の日や長兄に聴く父のこと

遙かより病舎の窓に祭笛

啄木鳥つつく普請の音と競ふごと  
龍田姫降りし錦を鳥瞰す

羊蹄山侍女と降り立つ龍田姫

金柑のたわわに熟れて母逝きぬ

忌に集ふ色なき風に吹かれつつ

遺影より見詰め返され盆の月  
産み終へし鮭流るるに身を任す

川底に口開け鮭の往生す

寒雷や山の罨を起こしたる

雪眼して彼方真青な空が満つ



大吹雪白魔と化して視野塞ぐ  
湯豆腐の味深まりぬ雪ごとに

熊祭り蝦夷えみし等の声高らかに

恩人に次々逝かれ曆果つ



曝書の空

高野夕雀

高野 靖

昭和十六年十月十九日生

千葉県船橋市

昭和六十三年よりNHK俳句番組を視聴、俳句に興味を覚え、平成五年鹿児島赴任を機に「湾俳句会」入会、現在に至る。  
湾同人、俳人協会々員

初富士の威風物干竿の先

お降りの傘さすほどもなかりけり

深川の路地の暗きをつばくらめ

鯨浮くごとき里山遠霞

化野の名も無き仏桜咲く

夜 桜 や 月 高 々 と 嵐 山

亀 は 皆 石 に な り た る 花 の 昼

や う や う に 曝 書 の 空 と な り に け り

飛 魚 の 胸 鰭 立 て て 焼 か れ た る

柴 又 の 汁 の 濃 過 ぎ る 冷 し 蕎 麦

椰子の実の詩の浜辺の夏怒濤

深川に閻魔堂ある暑さかな

秋立つを待てぬつくつくぼうしかな

踊子の裳裾の揺れの揃ひたる

月仰ぐ命の管を全身に

下り築瀬音の少し歪みたる  
多作なくんば多捨もあり得ず翳雲

秋夕焼関八州を束ねけり

燈火親し十年間の誌の厚み

別れてはまた寄る鴨の黝き帯



餅搗く人代はるや音の変はりけり  
雪になりきれぬ雨かな浅草寺

帰り来し妻の纏へる寒気かな

枯葦原渡舟の棹の見え隠れ

2

随  
筆

“大沼”はへら釣りのメツカだ！

谷内 ひろ志

「釣りは鮒で始まり鮒で終わる」とよくいわれるが、私の場合は鯿はせで始まり鮒で終わる。大阪の淀川の下流域の町に生まれ育った為、中学生になると鮒ほり、鱒せじ、鱧等さよりも釣っていた。何しろ満ち潮になると、海の魚が上って来る。

その頃は釣れば、何でも良かった。勤めに出ると、誘われるままに船釣りもやり、鱒きす、鱸すずき、鰈かれい等よく釣った。豊中勤務の柄、本社（東京）から来た上司に、へら鮒釣りに誘われ軽い気持ちで同伴した。箕面みのおにある釣堀で、餌はウドンを細かくしてサナギ粉を塗したもの。張り切って竿を出したが、口に喰ってくれない。終日釣って僅か三枚、相方は二十五枚釣った。苦い惨めな思い出が、今でもよみがえる。

本格的にへら釣りと取り組んだのは、東京へ転勤してからである。へら釣りの仲間がいたので、早速本社の「へら研」に入会し、毎月の例会は欠かさず参

加した。

先輩たちは、親切に指導してくれた。お蔭で一年程で、時々上位に食い込める位になった。十年近く釣行すると、関東周辺の釣り場は、あらかた体験した。夏は泊りがけで富士五湖、早霧湖、三島湖等々。管理釣場も幸手園、椎の木湖、三名湖、等々。冬は、都内近郊の釣堀。休日は、子供を妻に任せて試釣に出かけた。今でも妻に感謝している。

釣りは、何と云っても精神が休まる。自然の懐に抱かれ、のんびりと竿をふる。そして魚との駆け引きを楽しむ。仕事の悩みも憂さも忘れ、浮子を見つめる。誠に心身共に癒される。

長野では、山女魚、岩魚、鱒釣りを経験したが、溪流釣りも中々楽しい。足腰が弱った現在、とても釣行は、出来ない。やはり私には、へらぶな釣りが一番良い。縁があつて北海道に来たが、決断してよかつたとつくづく思う。招いてくれた先輩に感謝感謝だ。雄大な大自然に、心底満足している。

其の後、転勤の希望先は、道内なら何処でも可と申告。お蔭で旭川で定年を

迎え、終の栖すみかは、蘭越町である。大沼で釣りができるので、現在は幸せいっばいである。釣堀で釣っていた頃、先輩同僚たちと、大沼へ釣行している人達を、羨望の想いで語ったものだ。大沼で巨べらを釣りたいと言っていた先輩たちも果せぬま々亡くなった。先輩の分まで頑張るつもりだが、私もよわい齡七十四歳。余生は、残り少ない。

今年は何としても 五十上を釣りたい。仕掛けは道糸三号、ハリスは二号で挑戦する（鯉が来ると困るが…）。五十上に“恋”しているから仕方がない。へら鮎に関しては、黄門さんの足元にも及ばないが断じて云う。「大沼は日本一の釣り場だ」。風光明美、駒ヶ岳あり、交通の便良し等釣り場環境も抜群に良好、へら鮎も健康。その上、初心者でも親切に案内してくれる へら鮎の名伯楽 黄門さんが健在である。この素晴らしい釣り場を護って行かねばと切に思う。

おわり



# 越中八尾 「風の盆」

高野夕雀

長野新幹線上田駅で乗り換えた観光バスが井田川を挟んだ八尾町民広場に到着すると、対岸の山の中腹に密集した家屋の一団が忽然と姿を現した。

越中八尾の街並みである。

バスを降り、井田川にかかった禅寺橋を渡ると民家の間を急な勾配の上り坂がある。

その急坂を登り切った辺りが西町である。

午後五時頃だったのだろうか、丁度その辺りにさしかかった時、路上に人だか

りがあり、数人の踊子が踊っている最中であつた。

これこそ有名な「風の盆」の町流しである。

ものの十分ほども経つただろうか、しばらくして踊りは終り、踊子たちは待機所である近くの公民館へ引き揚げて行つた。

後で分かつたことだが、現地に着いていきなり「風の盆」の町流しに遭うとは、これは本当にラッキーだったのである。

この踊りは越中八尾の盆踊りで、二百十日の厄日に豊穰を祈つて踊られることから「風の盆」と呼ばれ、伴奏の胡弓の哀しい調べで全国的に知られている。

今年初めて作られたという町流しのスケジュール表によると、これから午後



七時まで踊子たちの食事兼休憩時間に入る。

しかし休憩後踊るか否かは従来通りあくまでも各町会の判断に任せられ、手許にあるスケジュール表は単なる目安に過ぎないとのことである。

踊りを待つ間に、バスを降りる時貰った夕食の弁当を食べようと思ったが、無料の休憩所は殆どなく、あっても中は観光客で一杯で座れそうにもない。

どこか適当な場所はないかと街路を歩いていたところ、「八尾ふらっと館」の前の広場のベンチに一人、二人は座れそうなスペースを見つけた。

良く見ると周囲のベンチに座っている人たちも弁当や何やら食べている。

その暑くて狭いベンチで弁当をいただき、荷物が軽くなったところで、今朝

家を出る時途中のポストに投函しようとして持ってそのままになっていたはがきを出すべく、妻をベンチに残し、郵便ポストを探しつつ少し町の様子でも見ようかと東町を諏訪町方向へ歩いてみた。

意外に早く郵便局を見付け、その前のポストに投函したが、その時何処からか胡弓の音色が聴こえてきた。

その方向を見ると、路上の一角にちよつとした人だけがある。

まさかと思ひ近付くと、何と東町の町流しが丁度始まったところである。

私のつい目の前、僅か一メートルほどの距離に、十数人の踊り子が地方の演奏に合わせて踊っているではないか。

唄い手も年季が入ってようで、なかなか味のある良い声である。

最初は痩身の中年の女性、つづいて太った中年の男性が唄った。

踊りの後から胡弓、三味線、太鼓を奏でる地方数人が続く。

嗚呼、これこそ本当の盆踊りなんだと、思いがけず深い感動に包まれた。

向うのベンチで待っていた妻に直ぐに電話し呼び寄せたが、実はポストを探しに出かけたお陰で偶然出くわしたこの眼前の踊りが、その夜我々の観ることができた最後の踊りとなったのである。

三十分も経っただろうか。急に踊りは終り、踊子たちは待機所に引き揚げて行った。

その後、我々はスケジュール表の午後七時から始まる夜の部を楽しみに、東町から諏訪町境界の緩やかな傾斜の石畳の街路を行ったり来たりして時間をつぶした。

時折その街路を時雨が通り過ぎ、石畳を濡らす。

どの街路にも観光客が溢れていた。特に東町から諏訪町にかけては路傍に立つ人や座り込んで踊りを待つ人でごった返しており、歩くスペースを探すのさえ苦労した。

ところが、開始予定の七時を過ぎ、さらに八時を回っても、どの町会でも踊りが始まった気配が無い。

人込みの中から「観客が道に溢れて危険だから、踊りは中止になったらしい。」と話す声が聞こえた。

帰りのバスの集合時間は午後九時である。

我々はバスに遅れないよう、後ろ髪を引かれる思いで帰途に就いた。

八尾町民広場から路上駐車しているツアーバスまで町のシャトルバスで送って貰い、そこから今夜の宿泊地金沢へ向うことになる。

我々のバスが金沢へ向って山を下りる時、国道の反対車線には夥しい数の観光バスが駐車していた。

越中八尾の「風の盆」は三万人の町に三十万人（おはら十一町では五千人の

町に十九万人)の観光客が押し寄せると言われる。

十一町の宿泊施設には八百名の収容能力しかなく、したがって観光客のほとんどは富山市や金沢市の中心街のホテルに泊まらざるを得ないことになる。

当然、そうした観光客のための駐車場も足りない。

このため町は道路の反対車線を臨時駐車場として活用しており、延々三十分もそんな異様な夜道が続いただろうか、今年は土・日と重なったため特に混雑がひどいらしい。

二時間ほどで新幹線開業を控えた金沢駅前のホテルに着き、遅めの就寝ながらゆっくり一晚を過ごせたが、富山の山奥に行つて金沢駅前に泊まるのは何とも不思議であつた。

一泊二日とはいえ、朝早く家を出て夜遅く帰宅したこと、また二日間の中身の濃さから二泊も三泊もしたような気がする今回の旅行であった。

平成二十四年九月

# 龍田姫／曝書の空

2014年3月1日 第1刷発行

著者 谷内ひろ志／高野夕雀

発行人 谷内ひろ志

出版 らんこし作家デビュー・プロジェクト

© Hirashi Taniuchi 2014



